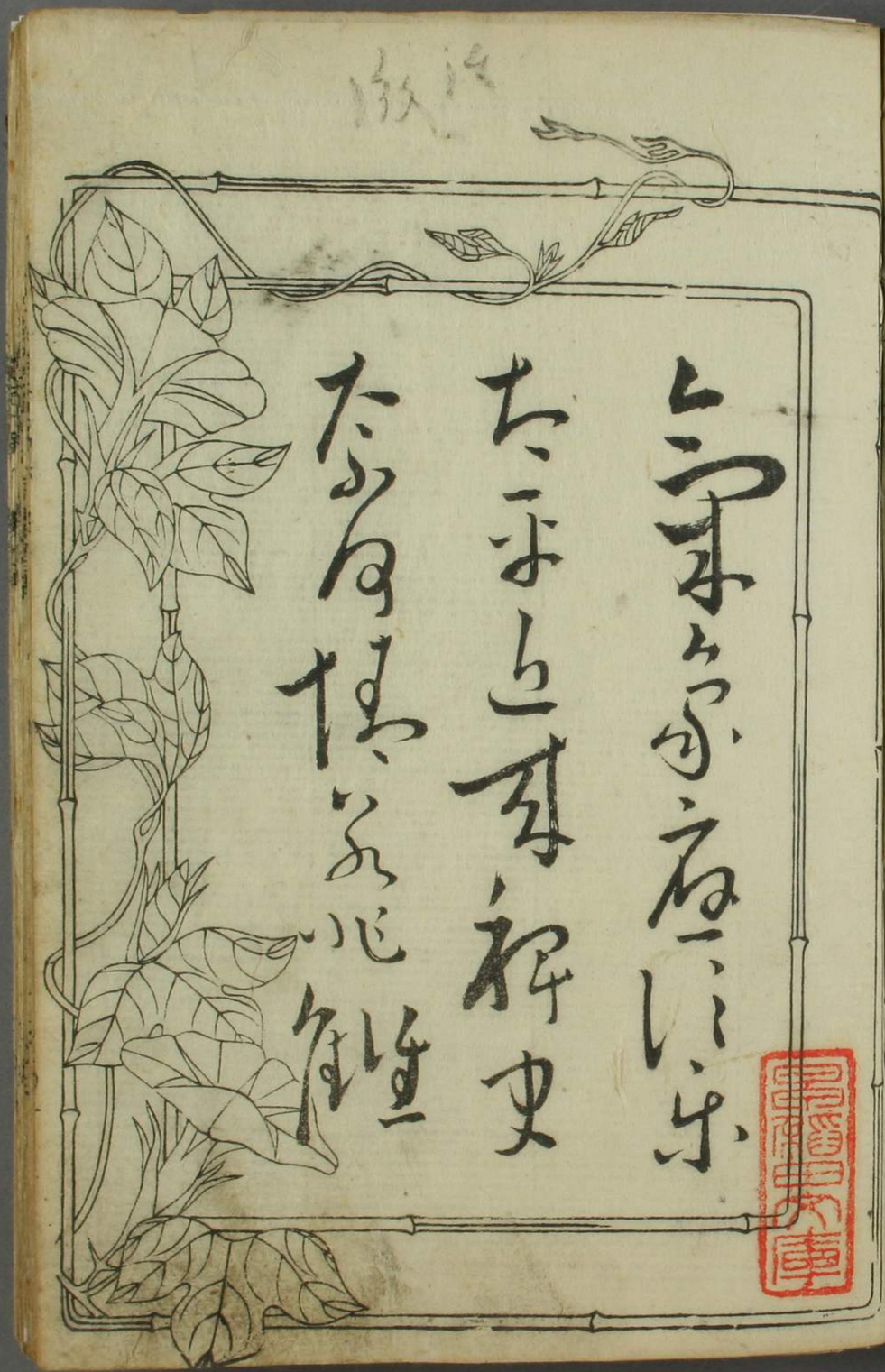
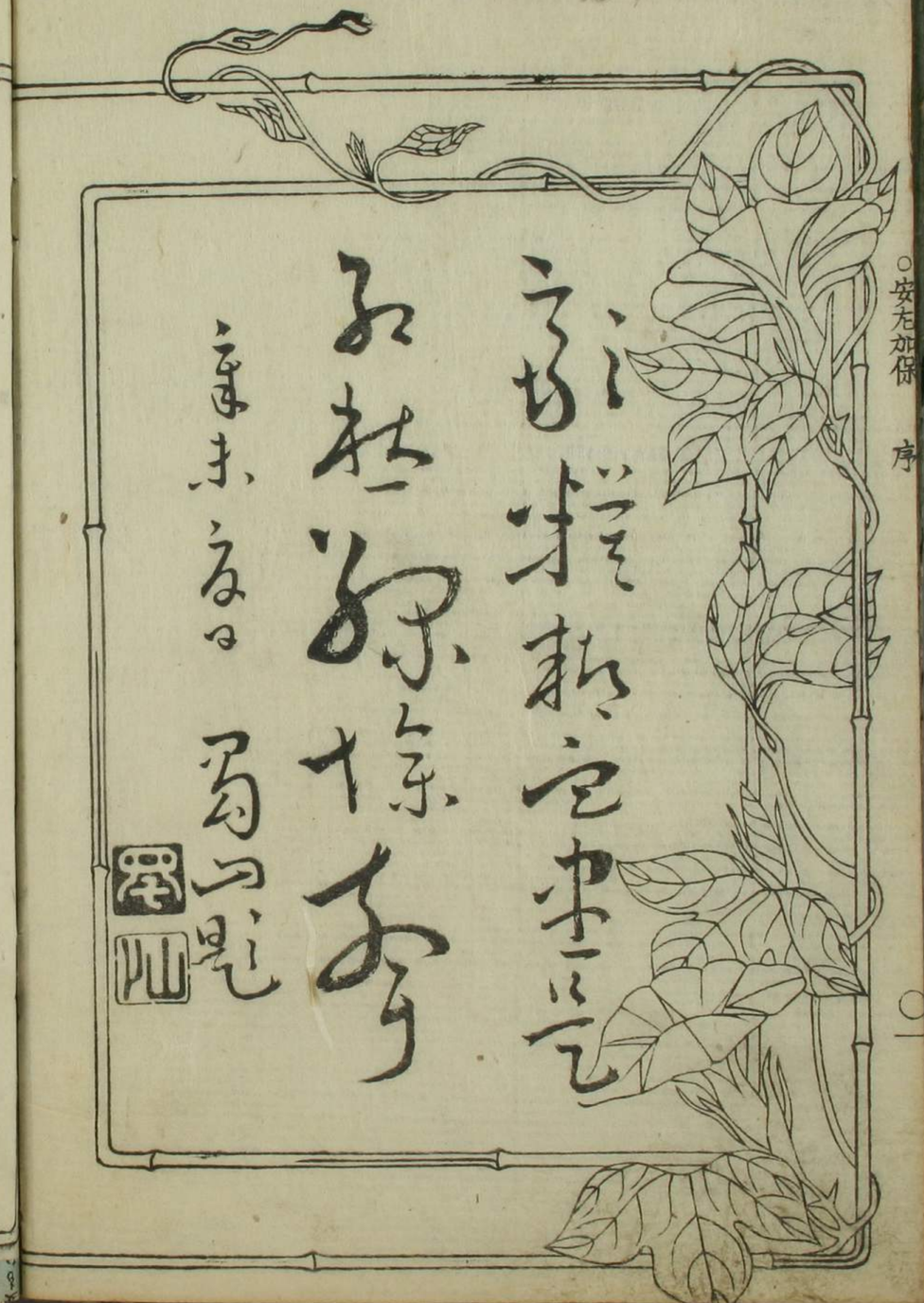
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Centimetres

3149
9

へ13
3149
6





弱蒜内
惰雞菴

佐伯一清
德壽妻阿茂
木綿屋治壽

大意

前編五冊は、往古宮城阿蘇次郎春雄なるものゝ、産出るよう成長よりはけて、有趣話柄どもありて、春雄一年宇治の螢狩よりまうゝ、偶秋月弓之助と嬢深雪らの、佳人と奇遇其後明石の浦と夜泊して不料も遂に那の源雲に張倉らぐやうるき兄風出来、私と私との東西と別を去、両田良縁成隔たるまでを載す。

後編五冊は、阿蘇次郎故ありて駒沢次郎左衛門と称う、其君大内介殿を諫んと東へ下る、そのより種々の傳奇ありて、めざゝしく数隙、非常の勲成樹て、精忠の名成海宇に顯はす、又源雲も貞節の為にそぼくの艱苦を志のびはゝ、遂に一生情郎春雄と、備老の好逑成はす、結局、

狗濕志るす

朝顔日記姓氏譜畧

諸侯

菊池左馬權頭武頼朝臣　太宰世子龍壽丸君　父少貳殿

大内介多々良滿興朝臣

武人

山岡玄番允秀門　吉弘市正

冷泉帯刀爲猛　相良主馬

駒澤次郎左衛門春雄　駒澤祥一　父了菴

岩代瀑布太　秋月弓之助稚朝

笆虬之進　父虬太夫　荒尾虎橘　父弥平左衛門

花岡山十郎　小野右近

瓜生主水　湯浅勘兵衛
安積潤藏　陪　健卒傳藏　僕　關助

女流
紫光禪尼　雲居方
嫩柏　蘭
水青　深雪
淺香　真柴
伽縷羅院母　茂
夜珠　瀬川
沙門

智遠慧長老　月心
祠官
加茂縣主祐包
醫者
荻野祐仙
卜者
佐伯一清
修驗
伽縷羅院
庶人
剛吉兵衛　橘雞庵
脫畏狐

木綿屋徳兵衛　大津庄官名傳いらず

朝顔日記譜畧　畢

朝顔日記卷之四　故芝叟遺話

柳浪　著

九回　踊

花は百日の好なく、人は百歳の壽れ――といへるハ宜哉大内殿の儒臣駒澤了菴老病ゑうけて、とやも危特ふせまゝけをバ、親屬ゑ拠方ゑ集合てゝやう、我薄命よして實子祥乙が行跡よりらぬゑ見きゝ、長く勘當ゐれよびてそのゆくゑゑ志らず。ゐまゝ各志らゐくさと好ゐ、了菴不肖れゝとといへども、形のごとく秩禄といなぎき、二代の君ゑ仕て、軽からぬ恩命とかゝふゝ、剰中老の席をを汚しつゝそもゝが政事加談の職とゝハ、戰場ゝてハ軍師の

指揮をうさとく。治世の掘密に參判ぬすいとして。當家ふかいてハ。古来よりとも一個ふかぎ。比なき重職なり。ひくる箕裘を襲んどもの。姪兒阿蘓次郎ぬらて外なる。さまと渠もと青雲の志わて。親衛を望む嗚呼。漢ぬれば。こう跡式に讓らんとゝとも。ぬてうたやをく承引べき。さるふよりとも死たるとも。全然病重しといつゝ。急ぎ都より呼らゞし。ふの遺書を眎。各餘儀なく勸解相續せさせたまはるべ。今しも目に瞑ぐとも。いさゝう憾ハのふらじと。叮嚀に咐囑しゞ。程もあらを無常の風にさそはきて。あはを敢果かく黄泉の旅におもむきける。去程に宮城阿蘓次郎ハ。去ぬるゆふべ。暴雨に沮らきて。はふぬく明石の浦に船泊せしゞ夜ふけ人静まて。月いとよくくもたると愛てあてしゞ。偶と隣船なる琴のこゑとぬきしよりこうらずも。秋月弓之助ゞ女子深雪と環會。深雪ゞ貞操のせちなる情に絆さき。直に他を遁とせしをうら。ゆくてぬくも。深雪ゞ船俄に蓬に拽かけて。馳出せしめへたちまちまと西東とうき別きしてゆゆくく都にのぼるき。故の下河原に僑居たきども。肚裏こハその人を忘るくひまぬく。猛き武士といへども。戀にいたもいよいよふらひ。ぬねにたゞ快々として樂しまず。浩処ふ周防の山口より。火急の消息して。伯父ゞ菴重き病に伏し。息あろうちふ。べきふとあり。斤時もとやく下来へしと。

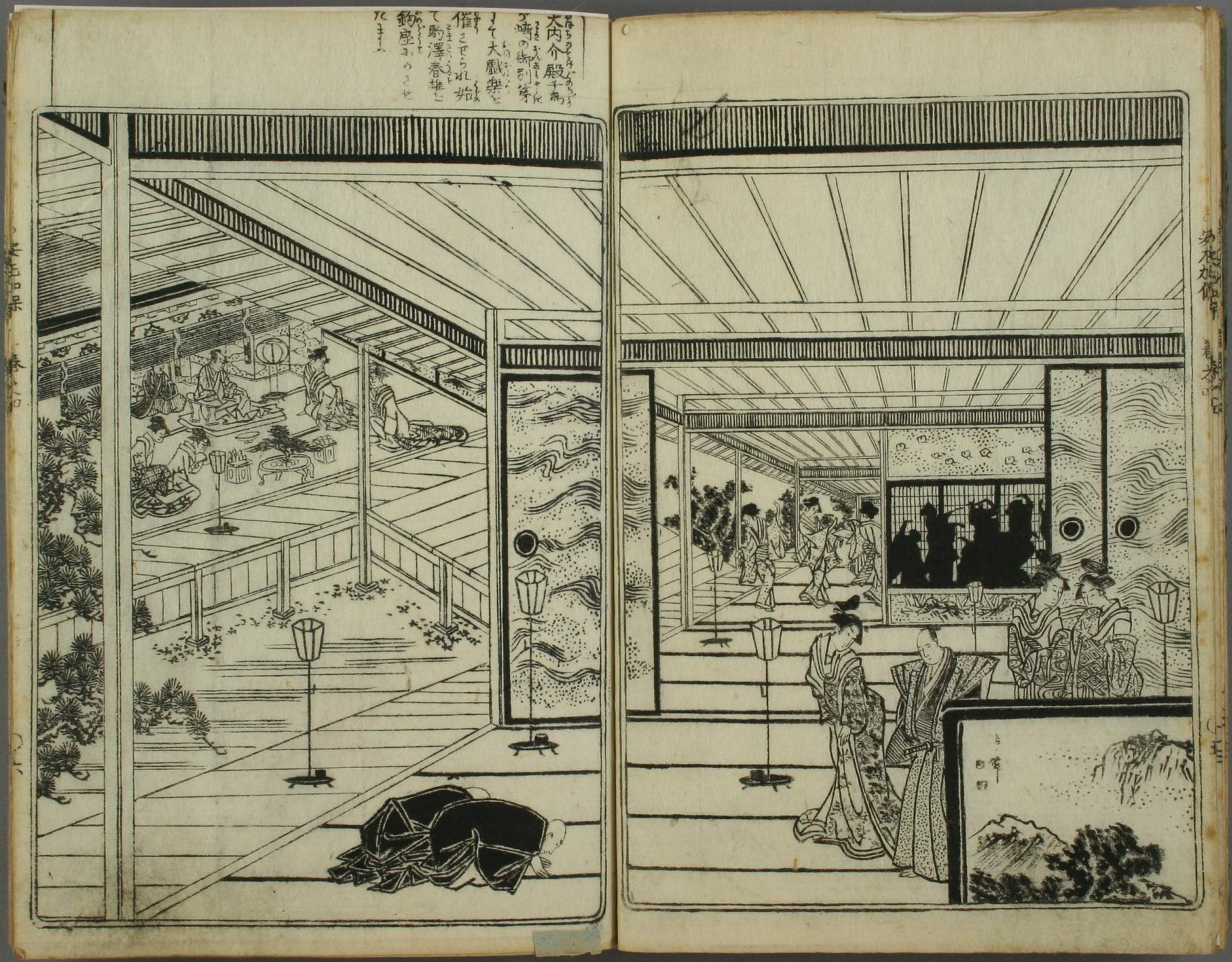
いいおこせたりけきバ。阿蘓次郎ハ又しも席ハ煖むるに
いとまなく。恩ある伯父のおとゝなきべいと氣ぜつハしく思。
取るものもとりあへず。その日のうちふ起行して。且暮途
ハいそぎて。わけハ程なく山口なる。駒澤ゞ邸ゑいたりぬ。
親屬眷族。まちまうけて阿蘓次郎ゑ對ひ。家主ゑ菴
くや仙去たゞ。故翁臨終ゑ寫めらまたる一書あり。和主ふ
遞與くまゝとの。遺言なりと告ける。阿蘓次郎聞もあへず。
双眼涙ゑうちうるゝ。忙しく遺書ハ披覽きバゑ菴代こゝ
主恩をかさね。莫大の登庸ゑ遇て。かくる重職を蒙りぬ。
さきども何一個寸功とも建をして今徒ゑ席の上ゑ終
ぬきバ。おきのゞ遺る恨るゑ。あいを海曲て。おの家督と嗣ぎ。

ときゑ敢ゑ代ゑて。國のたゆ家の為ゑ精忠ハ盡しくまを
よと。ふろへる手して。いとこまゞくと書たるふゞ。阿蘓次郎も
ほとゞ悲嘆をかし。義理あろ伯父の死後の托さても餘
義もなきおとどもかゑ。己ゞ宿志ハ遂んとて。強て推辭ハ
道ふらゞと。心ハ決して允諾けきバ。人ゞ擧ゑて悅こび
けり。やゞて一通の願書ゑ。ゑ菴病危きふよゑ。姪宮城阿
蘓次郎ハ。急養子ふふしたき趣ハ志たゞめ。親類の何某。
おきを月番の家老ゑさゝ出し。その執成をたのゞけゝ
ふ。おの由家老衆ゝ。上聞ゑ達せらましゝべ。事故ふく。御
聽をゝあゑて。家督相違ふく仰法けらまぬ。阿蘓次郎ハ
おきゑゑ。ゑ麾ゞ家を繼。姓名ハあらためて。駒澤次郎左衛門

と称しけるいまど中老席とい。仰せ出さるねど。先規のおとく政事加談役よそおさをける。おを全く次郎左衛門年弱けをども。才學世よ勝を。そその性の温厚の聞あるよよをとそ。やゞて次郎左衛門い。父が喪ゆ発し。葬式祭祀ふど。形のおとくことをおこかひ。七七の忌もはてよけまゞ。おとふ築山の館よ出仕ゆ。奉公をぞくげをけろ。次郎左衛門。養父了菴が遺言をば心骨ふ淡ておを守を。まさ君の御大事よハ。命ゆ塵芥よをも軽ド。無二の誠忠と盡さんと。准備しぞ奇特ゆる。もとよをおの次郎左衛門。加談役のおとるをば。平生家老衆ゟ政弊のおとと談せらるふ。職分のことゆ

まべ一くおれを辨論をろふ。その判断をるもゞ明白よて緊く道理よかるひ。まゝ人よをぐをたる卓識ふどをあをけろゆへ。家老の面々大よ我とをを。其才養父了菴よも出藍て。當世無双の壯佼。後来い國器よもたつべしものよをと。いと頼母しくそおもひけろ。をとも次郎左衛門。いゝ謙遜。いさゝろも唐突たろおとゆよをねば。人の眼稜よもたくざをけを。おくて許多の月日を過けろ後。當主大内介多々良滿興朝臣ハ。往歳衆勤して。鎌倉よ在せしゞ。當時新大磯の柳巷第一の花魁松菜樓の瀬川とふもの。艶色よまどひ。晝夜酒色ふのえ荒ませたまひ。營中の御勤も懈がちふるふぞ。誠忠の近

臣どもかいろ〳〵諫言を奉りけるふ。そのたびおとゝ總て御手討ゝ被させらるゝ。おとしもあら〳〵ゝと。御所行のゝ多かりけり。おのゝこと反うゝ幕府ゝ聞へしふや。おゝ時管領上杉殿ゝ。大内家の長臣。冷泉帶刀とゝふ者を召ゝ。滿興殿放蕩のきこへあり。事あらさまおふらざるうち。再應諫て行ひを改めらるゝバ。珍重なり。倘も其事募ふ。おゝ。數代聯綿とゝ家國ゝい換らるゝまじ。早く儲君を願いて介殿とい押籠ととて志ろべしと。御内意ゝ仰ゝさゝぬ。冷泉帶刀。しゝを承たまはりて退出しゝ。周章をゝとおはゝふらず。いそぎ本國ゝ急書ゝ下し。管領ゝ志う〳〵の御内意あり。事遲々及び被バ。臍を噛の悔あらん。いち早く評定ゝおよいるべしとの文言ふゝ。かくて志の早打。寸刻ゝ爭そひ馳つゝけるふぞ。當家の一族山岡玄番允を始とし。家老中列坐ゝて。志の急書を披見るゝ。各色々らしふひ。おい由由しゝ大事被ゝ。志うゝバ大評定とるすべしと。忙ハ志く一藩中ゝ令下て。騎士以上のゝものども一人ものゝらず。惣出仕とゝさしめ。大書院ゝハ。山岡殿を上坐し歷々の衆。綺羅星のゝとく並居たゝ。藩士の面々搭式ゝ照ゝひて坐を占。さしもの廣間ゝも居あまゝ間おゝ。據側まで。人からぬ所もるし。大内家の大身ゝるゝこと。是ふても志るべし。月番の家老相良主馬。滿坐を見るゝ


大内介殿千鳥
嘗の御引等
して大戯樂を
催させられ始
て駒澤春雄に
鈔座おめさせ
ぬ

帯刀が来書の趣を披露せ。御家の安危の時なり、たとひ小禄の衆たりとも。御上の為に忠義を重じ、おのゝ所あるべき憚なく申見らるべしとぞ叙よる衆人こを伝聞よりて。一同にいつと平伏せしが。ほまでの諫言せしものども。盡く御手討に遇しと聞怖おのゝたゞ眉うちひそめ。議合のをりて黙々として一言も發さるものなし。まさ重職の人々詮議區々ふりといへども。いづれも今一應も。諫言を奉るふもらぢ。しようふらふさせる良策もあらざりきが。まづその日の評定いさづらおもくぞ見えふける。かくて三日四日があいだ。うちはぎき例のおもく。藩中惣出仕をふしけをども。家老衆とは

志ゆ異なる一語を出をものはあらざりけり。駒澤次郎左衛門ハとが弱年の分なれ省く。さためて駒の歴々の中にハ。何とういふ出る人もあらんと。頓口無言ていうて居たりしいまだ評議さだまらざ。かくいたづらふ日數のたゆもくおとと。もどかしくおもひさの時列を出てこやう、不肖の僕歴々の御前を憚らず。さし出がましくぞ。當家危急存亡の秋なあたり。鄙衆あるを申見ざるい不忠なるべし。殿さでかり放蕩な在ますとも。そこより聰明なる御性なをべ。ひとをら臣たるもの誠を盡いづくまでも。諫申をふ志くいわらし。僕ふり仔細の待りこ。諫言言上やうの手段あをバ。あいを御ゆるさ

をかうふこいそぎ鎌府よまかを下ばかおそらく
仕課ざるとハいまじと言葉ゑ放つてまうしけろ。
山岡玄蕃允ハ胸ゑ一物あをて。かく殿の不行跡ゑる
沙汰を聞よを。謀成をつとぶどく肚裏ゑ悦を生じ。
己が嫡子ゑ儲君ゑ立まくれるゆへ今もし駒澤ゞ
異見を用ひて厮ゑ鎌倉へ下しまゞ。極てとゞ大望
の妨ゑるべしこそらさぬ鬙ゑ顔ゑ駒澤ゞ語とじ
きて殿へ直ゑ諫言とハ心得ど。おをまで諫し者を
手討あてしハ幾個といふをを〻ず。今まと諫んとせ
ばいとばらゑ激怒とはじ損あをて益からん。十全の奇計
もあらずして、古老の人をバ閣とき。和主ゞ分際ゑて。諫

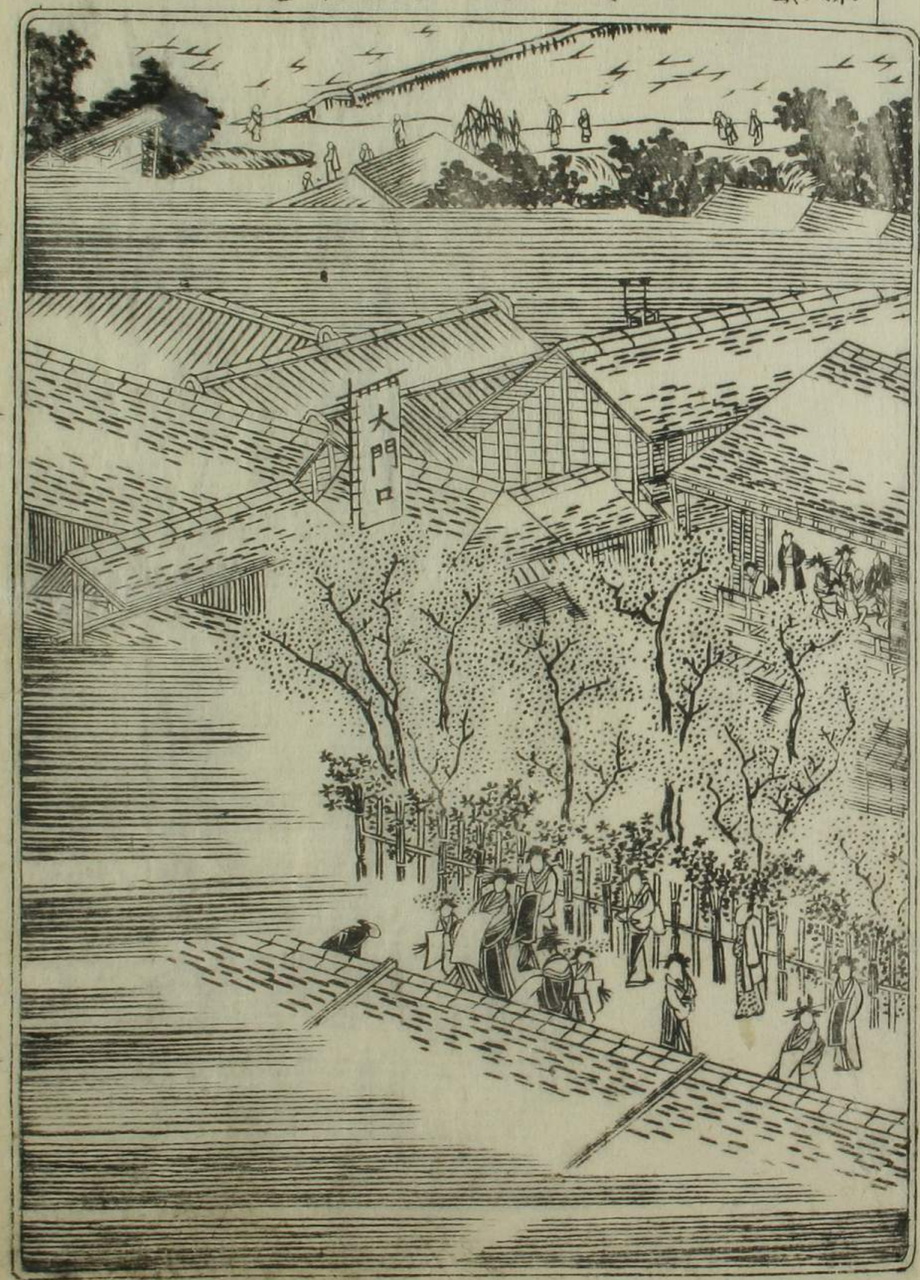
爭ふどくい傍痛しひうえりさをとさくもをべ。次郎左兩
うちかしまを仰ことく僕ゑとき。その任ゑあたら
ずといへどし。今度家督の御礼と稱し。君邊へ近つれ
さへいたしるハ。施をべき一術のくべるからゑ。あゑがち
ゑ僕へおの役仰つけらををしと。丹誠面ゑあらハれて
おこうゑ申請けをば相良主馬おを同し。駒澤氏ゞ
思慮あるこくハ各もおらるとを形。さをばその望ゑ
まうせおをと下向かさしむとも。萬ゑ一失もさうらう
まじ。主馬ゞ腹ゑ代てうけあひ申各おをゑ狹せらる
べしとつをおを式さいて同列あへて拒むものかく。異口
同音ゑおの議至極よろしかるべしと。諾ゑひけるゑぞ。

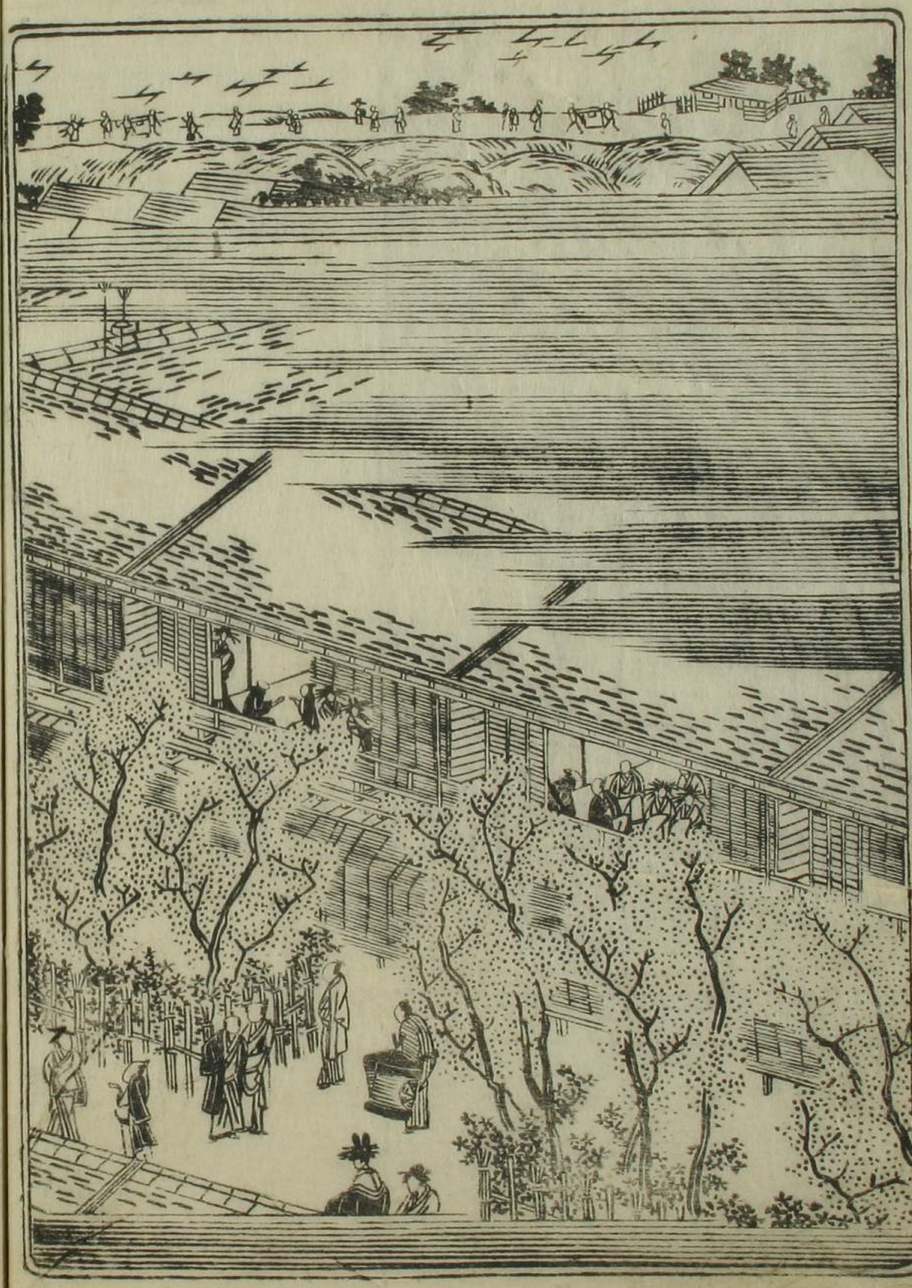
玄蕃允もせんをべ申く。多分の衆議ゑ悖ゑ申たく。澁澁承引て評論頻ゑとゑまゑぬ。おきをふよゑを相良主馬ハ忙しく。同僚連書の返簡ゑ認たゝめ。使を馳て。此由と在鎌倉の同僚冷泉帯刀うとへいひゑけゝる。おの時まゝ。山岡玄蕃允もとゞ企叛の荷擔人岩代瀑布太といハものゑ密書を下しぬさるほどゑ大内殿の在せる亀ヶ谷の上第ゑいゝおさい駒澤何某とゝもの殿へ諫争の為として近々下向せるよしゝその風聞かしゝまし。近従の人々いちしやく。おのゝよゝ殿へ言上ふけまバ、暴姓烈火のごとき大内殿。近従の語をもあへず。勃然としふるひ怒らせたまひ。什麽の次郎左衛門とやらん。ふまぬうゑたる小冶郎ゑ。予ゑ向つて異見ゑど〳〵い奇怪のいゝうをし一言ゑとても傷觸ゑ申さバ、たゞ一刀ゑ討放しくきんと。息まき高く罵たまゝ。近従頭岩代瀑布太御前ゑむゝひ。傳へ承いる。かの次郎左衛門と申ものハ。ふまけしからぬ白者ゑ。もしも御目前ゑちらぢけたまゝ。いゝゑる椿事とゝ仕出し。おゑきゑ御恥辱をうけさせたまいん。さゑらバひとゝとゑの御手討かとふていよも御憤氣いとをさせたまいゞ。おゝゞ渠叅着して。いゝほど拜謁ゑ願ふとも。絶て御値ふゝらんゑいと。ひそゝゑ山岡ゝいひ来したる密書ふよゑ。かく申ん詞をユゑして讒言とを搆へける。大内殿い天のかせる英雄とよバゝ。きハゝて怜悧御性なるとも。古来

よつ名将も色ふハ惑たまゝまらひ。況て麹孽てゝものゝ精神を狂ハしたてまつる。剣才まと諫を拒ふ足。總ての人を蠅虫ともおほしめさねバ。今かく瀑布太ゞ激發るとうゞ。し。いうさま汝ら申をおとく。次郎左衛門の匹夫下郎見もおうゝ眼の汚。汝等きゝるべく計へと仰をふゞ。瀑布太ゞ〳〵笑とゑし。仕をましたるといさをける。日あらず駒澤次郎左衛門鎌倉ふくだる。由居ゞ濱の御中屋敷ゝ落つる。家老冷泉帯刀ゝ對面とゑし。よろづ示しあいすことゞを。あるて。直ゝ執謁とぞねゞひける。殿ゝい岩代瀑布太等ゞ讒ゞ信ド。一度も召るくふと拒けきバ。さしもの次郎左衛門もせんをべゑく。今日明日と晩て。いたゞらゝ一月

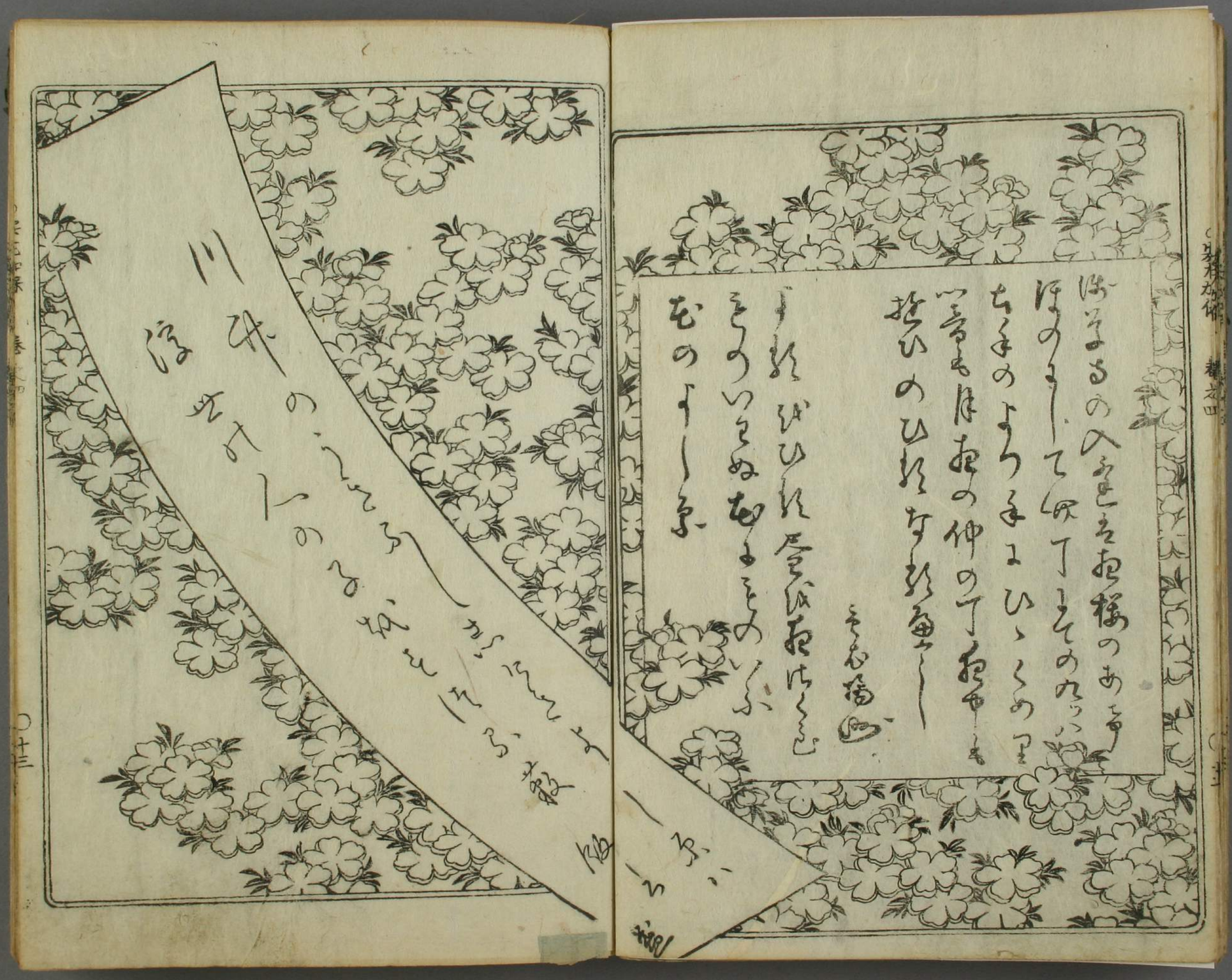
ぢうるを過しける。帯刀ふゝくまをと愁ひひそかゝ次郎左衛門ゞ招きていうぐせんと商議をゝせバ。次郎左衛門つふやゝう。さあらハ御近従ゝたゝる。如此くくはゝらひたまへと。さゝやきける。帯刀まを聞てふゞもぐゝぶゝ合へるとて。そのゝたゞまるる殿の内執事。湯浅勘兵衛ゞ呼よせ。次郎左衛門ゞ申せしゝと口寫ゝ吻咐けきべ。勘兵衛心を得て。詰日御前ゝ出小臣前日狂ゞる巷説ゞ承いるつ。そハ先頃君を諫ゝ奉らんと。廣言ゞ放てまゝ下にる。駒澤次郎左工門度々執謁ゞ願へども。今ゝれいて御値るきハ。君全く渠ゞ鋭氣を嚇をたまゝ由ゝるゝと。彼所此所ゝて流言

弥生の頃新大阪の街頭小。幾百株の櫻花を植列らべ吉野泊瀬よも勝りて春色濃しく嫖客うち集合歡の花時を對酌とし人間の歡樂と極其繁華いとゞ盛りなり





新大磯
名たかき遊君
三浦樓の瀬川
ゲ嬶郷くる容
止とうすそ
てろい分てゐの
君國色無双
多アとゐん薄ぶ
情田ハ文殊
瀬



ものゝれよし。相公の御勇氣よりも似げなく燕雀よりも
き一個の駒澤。縱令緩怠なるゝと云申出すとも。只御一
句の下よりひふせたまへべし。志ろしめまゝ煩擾ふかば
さきるべ。御目ゝさるゝやいる。一言もいとせとて。威嚴
を示し。即坐に追黜たまへとき。渠もといふなる巧な
宿搆居とも。支度たちまち相違して。鼠のごく逃去る
侍らん。さあらばいたう心地よくゝべらんと。語の裏
に猛勢を含。迂遠しふ激ましたてまつりけるに。大内
殿たくゝ聞召をゆるさまし本府にて。家隷も多ける中
ふ。渠一人抽んで。ゝとさらいまゞ弱冠の身として。予ふ諫
言仕るさんとい。さてゝ斗膽奴ゝ。さらずいまゝ世間

をもちぬ井の蛙。向ふそどの奴才め。必竟武邊の大体
をもゝきまへねば。大國の主ゞ逸遊を。驕奢のおとく
心得たらん。好ゝ渠を呼出し。女どもふ大戲樂させ
て肝を潰させ。場蓋とさせて弄東西ゝ取しくまんこ
近臣に命らまゝやく准備をいそゞせたまへ。ゝ
ふよりて奥女中三十人。生藝者三十人。熟藝者
三十人併せて九十人の美女を。ゝとゝやびやう
形る一様の衣裳をさせて。千鳥ゞ崎ふる御別荘に
いて。大戲樂をぞ催さる。ゝやその日ふもふりけまた
無よい花燈を點し羅ね。椽側に八。猩ゝ緋と緑羅紗
を二條に布ゝたし。梨園の子弟ハ。片側に並び居て。

吹彈よ妙なるくさしむ。殿よりかの駒澤次郎左衛門を黎明よりて召よせて。小書院よりへさせ。やしやふべよちづきて。戲樂なるどめさせらをぬ。さて九十人の戲児どもいそて嬌艶よ粧ひかざりて。その〳〵綾羅の袖なる飜し。身の軽きことい蝶燕よもあとれらを。次郎左衛門ぞ語居たる座敷なる輪なるして舞環つ。絲竹の調ハそゝろハしくも耳なる慌ばしめ。戲場の飾い花やぎて目もあやなる。大内介殿いいでたぼしけん。戲樂を半よ息させて。次郎左工門を御坐の間よめさせらる。大内介殿いかゞ〳〵次郎左工門とやらん。何奴るをば。予ら猛威を冒して異見とせんを不敵もの。いかなる相貌ふるよやと見まほしくれば

ばせしらへ。女中ぢらいさらなる。戲児い戲服のまゝふて。殿の御側よ。稲麻のおとくかしぢきけるぞ。皆いひあいせるがおとく。名ふきゝし。次郎左衛門ぞ。手姿なる見人とこをゝ一とおぞるよりぬ。やどら駒澤次郎左衛門。膝行ふて。御眼前よまゝるいで。敷居一つなる隔て。額をつきてうち畏こつ。内執事湯浅勘兵衛。奏者として。駒澤庵ぞ躬次郎左衛門と禀あぐ。おのとき殿い。夥の女どもとともよ。瞳をさだめて商ハせたまふよ。おの次郎左衛門生を得て。容貌美麗よ。氣宇軒昂見えて。その人品のたとやなたるふ。ほよき心を志いてくいへたをば。ふよたけの心地して。こをぞふをるべくもあらず。加旃ずその拳動の瀟

作者曰ふの時次郎左ニ門ら打份と詳らかにかんいとくだ〳〵もつるべそのうへ衣裳のふの〻髪かたちの風ふるものゝ時代ふつを流行あく。その〳〵ゐいといまどとおり風俗ゐいまの人気ふわいず。いぶかしむ人もあてゐん。もうべやまの唄よいろ浮世

洒ゐるいさらふて。今日の拜謁ゑ打扮ゆる。長上下の着やう。小袖の漆色といひ。きたてざまの通ゐる。髪かさちの今様よいそぎう榮あつて。何処ゑ一點の醜態ふし。かくまび殿をそじめ。あるかぎりの女中さち。きばし眷戀て。肚裏ゑ十分の愛慕とさへ生じける。さまども殿ハ早追たてんゝおばす。御氣色ゐるゑ。中ふも專房の婦人を。と殿の御袖をひきて。今をそしちらう召させたまへと。〳〵やけび。殿もまと腚と。御覧あるべき。おゝんきさざろゐまび。次郎左衛門。ちこ。ちとう。と尻声高く呼せたまゝ。次郎左衛門いさゝゝ怖るいろふく。やゝけ〳〵きんで頭を擧まび。あたまい銀燭點〻羅ねて白日のごとし。女中がさい

きこさゑ。御盃ゑ〳〵めたてまつるい。殿ゑも次郎左衛門が。進退の閑雅たるとおろ。れのづらら御心ふかるい。御顔でせ〳〵やいらげて。御機嫌うるいしく。やとら大觥ゑてめしあげらも。そのまゝ。次郎左衛門ゑ〳〵ぎさをける。次郎左衛門いやゝきこれをいゝぎふ〳〵と一盃つがせ。たゞ一息ゑ乾乾淨〻と飲ほしけもい。女中たちいきを見て。こを きらども微笑ぬ。殿いきのあうさまふい〳〵興ぜさせた。ひ。次郎見事。おさやう。と仰すゑぞ。次郎左衛門。「ハット應。まさしも了髪ども一盃もらせ。まゝ一息ゑ飲ふしける。女中達いどよゝあひてざめく。殿いかさねて「次郎左衛門。汝い筑紫の産ゐるよし。さあるゑや。「次郎左衛門かしこまて。正是上

惠のおとく。郷貫い肥後の菊地よて侍ア。仔細ゐつて國と
去ロ。今い伯父了菴ゞ家督ゑ下しおうま。不思議よも君
臣の因ゑふし奉ア。感佩造化よれと。聞えあぐまゞ大内
殿るるゑど汝い儒者の孫児。さざらて頭巾氣るるもの
るらんとたもひしゞ。今日の打份とゐいざ風流たア。折
ふしい遊里へも往つらんる。次郎左衛門うけたまいア。いう
ふも御意のおとく。在府のはきくふ。伴よさそいま。深川の
妓院よまうアれひしゞ。れロよを喜瀬川と申処い日本一の
花街よ侍ア。那方ゐる。洛陽店の夜珠とゝ女よ。馴染と
かとねさらひて。おの夜服もその夜珠ゞ。といひさし。又
佶とふアて俛けゞ。介殿筦爾と咄いせとまひ。次郎左

衛門。くるしからぬ。そのあとまうせ。そてさて面ゑ上よ。
その夜珠とやらゞ何と志たるぞ。次郎左衛門まをく
慨慟よ双手ゑ突。小臣らの夜珠と始て一坐仕つアし
時。かまゞ申てべるふい。郎い山口の御藩士ゐるよ。郎の御
主大内介様い。鎌倉一の風流容と稱またまゝ。その御
内よてあアゐゞら。ふの打份い何ごとぞ。奴よ任せたまへと。
頼母しくまうとふ從せ。よろづかまゞ計ひふゐア。今日の
衣服もうまゞ截縫ていひき。さてしも喜瀬川の遊君い。は
ねゝ深切よ情あるれのふいとはてアかよ悠揚げて
ゐどく感服たる面もちゐアア。女中とちい袖打掩いて。
笑顔ゑかくせば。大内殿肩を聳せ。御声とげしく。汝

獨り信ぶかちて喜瀬川ぞうりと日本一と稱賛とそ旁痛きふとおを。もとや大磯の景氣い見たるう。次郎左衛門面答けるいいまぞ大磯い。一覧仕らずいへども。おとそ女の情のふうきふとく。その所の繁花おるふとい。世ふまと類あうまじく。小臣はじめてふの地よ下り駿き入いと。皺面にくりて叙ふける。大内介殿ふのびあへば。呵々と笑いせたまひ。海ハ田舎より下りて。やうやく昨日今日。いまぞ大磯の大廓ぞ見ぬものうら。さつふも道理。もし見せたらば何とういえん。褒う語もあらじ。いざさらば。今よりうしにを往ん。そまとやくと。近臣等よ吟味たまへば。眤近の人々いそがはしく供支度をおせう。その

きう。御庭さきおる水門ぞひらうせ。美ぞにくせし御座船よ召を。次郎左衛門ぞ左右よかしぼうせて。直よ大磯へといそぐせたまふ。おくてとや千鳥ゑ崎を後よふし三叉ぞ糾よ見ふがしとまふ。その絶景ふはうをおし。殿よハ次郎左衛門鎌倉とじめてるれば。案内をもふらじと。御機嫌のあまを。ふの舟行の雄手。雌手ふる。名勝どもをおちもおく指點していひきうせたまう人。次郎左衛門あまハ二州橋とて。納京よハよきところぞ。其処い首尾の松。東橋といふぞ。向ふよ見おろゞ向嶋ふるぞ。河西太郎。待乳山。関屋の里。浅茅ゞ原。鶴の森。五百崎。牛の御前。あまおる隄よ。鳥居の半

よゝ上あらいまたるい。見巡の稲荷。来方よ駒形堂ある
とれしへ遺せゝ。這方の塔ゝ見よ。あゝ古そ名高ゝ浅草
寺ゝまゝとて。ふの駒形よて。たもひ出しつ。

君いいま駒形あゝうぼぎす

ふい大磯の遊君。奥州ゝ。嫖客ゝ慕ひて。口騙たゝ句ゝう。
傾城ゝふものいげよ優しきものよあらぞやしゝ。ふと飽ず
しも。長くとものがたらひたまふおどふ。早御船もはき
たるふぞ。殿い次郎左衛門と従ゝへ三谷渠よゝ上陸せ
たまひ。土手八丁ゝ歩行たまふ。交加皿手の声い正し
く。帰雁のゝさはるくうとあやまたゝ。ゝを〳〵て衣
紋坂とふえ。見うへゝの掛ゝもとよゝ。とや大門口ゝ

作者曰在下ゝまゝと大都の名勝を一覧せゝんべ。唯人聞ゝ任て記せゝ。極てゝの次紋の杜撰れちんぷんとをおこゝ。看官幸ゝ海涵たまひね。新大水の風越も又ゝう

入たまふ。次郎左衛門母胎を出てよゝ。はゝじめてかくる
仙境よいとゝしゝゝ。且驚き且呆きて。肝ぢぶきたる
形容ふゝ。七座の大院い。世よ高くきこへ虚と実の仲
の丁。諸ゝけ手くだの情きゝる吾嬬女郎のこゝつよゝ。
意氣地をくらぶ京町や。今宵い誰と伏見町新町
角町めぐりもけば。水戸屁の燈籠ゝろう灰ゝ。誰
や行燈ゝげあゝく。横町の小茶屋よい。江戸素掻の声
かしゝがまし。きのごろ稜羅花魁よい。舞鶴楼の頂山
舞鶴。三浦楼の高尾い。清客よも名ゝきゝつ。その
わゝ。角の玉屋の薄雲るんと。呼出しの揺錢樹。かゝを
きらぎ。ふき等の姉妓とち。支那の和朝の綾錦を身

ふ纏ひ。小裙ういとあて。新艘妓雛をひきつれ。己が記紋の大提燈を前に點させ。八文字を蹈て。金蓮を〻む。おもよめでまど〻。嫖客ハ。ゆ〻しさをふさだて。道もさまあへど。次郎左衛門ハ志ぢらく殿よりぐを。とある檣子ふとちらりさし覗ハ。花のおとき美人満満て。蘭房のかさしう

「ろれてやをくるまゐの。ちぐるくるとしのあさ。

おぞのまゝ寝るをだもがを。

と一関の河東曲を唱たるハ。志らず何等の人かるふや。その声妙よいとめづらし。大内介殿ハもとより。おん潛行ゆ在ませバ。次郎左衛門と。近從少々らし具せらも大磯の仙窟とぶごりれく。汝をまいらせらもやがてまた。御宿房れる。松菜屋へ入せたまふ。もとよりこの院子ハ。すぐをて繁昌せし。由へ。いち早く簾子れろしあをて。店のさまいときりやうれを。殿の御愛妓瀬川と云ハ。いまゞ私下の世話の頃よりを賢氣れる粉頭よて。生を得たる國色ハ。一咲百媚の麗姫れを、瀬川ハとくよりを待まうけ。妹妓ハさられを。夥の藝者ども洞房よ集へて唱ハせ舞せ。百般趣きある遊ゞもとれ。大内殿を頴待たてまをを。そのとおろのさまハ。伽南の柱よ。水沈香の床縁れを。上頭ハ明の仇英が。密糸せし。一幅の金谷園の圖をかけつ。玉の瓶子ハ名も

ちらぬ珍花に挿ム。火鼠の皮子安の貝こそ敷けれ。琴棋書畫の調度。あるハ和歌の書巻とも。棚さかざまてうづだらく。茶香の具ハ七寶にちりばめたり。盃盤の類ハ。總てその時代の高萌描緑深青磁器も。おほくハ應天府交趾の産よあらざるハし。さてまさ麒麟の膳天鵝の肉ハそ見えたらね。山海の珍味に盡し。美酒ハ新豊よも優つべし。ましてさら余碧の屏風ハ。燈燭ハ輝煌あひて見るふまじもく。ひとく喜見城の樂もこれをよハ過じと見えふけ。さしもの次郎左衛門。ハの大繁華大繁富に着るよりも。只あきをあきをて。ちばらく語ふし。殿ハの動静に御覽じ。

次郎左衛門いうは喜瀬川といづれ勝れる。次郎左衛門ひを伏して思を入。前よハ小臣眼界狹小しと。ましの日の本よ。おくる極樂國のあるさとに志らず。喜瀬川のそを遊處の最上かりとよくろえ誤まち過當のさとを稟あげ。千悔ハよびがさくいと。ふらく慚愧していと面目没風情ハ。殿ハ渠が徹底感服せし体ふるを。ハのたびそ渠ものといひふせたりとハ。ハよりき御満悦とぞ。見えさせたまふ。さきとも殿の御心よハ。次郎左衛門志らく才あるものかをどもいまぞ烟花の情曲ハどハうとかるべう。れぞせしぞ。酒酣なるまをて。次郎左衛門坐配をかして興に添うハと。不文不武有趣出奇。間をあハせぬ。ハ

のこゝらず。その性もと温柔ふるふ。吹彈歌舞の雜藝といへども。一個として精熟せざるふし。正まさを天のゆるせる才子といふべし。ふをふようて殿ハさらぬ。瀬川とゝゞ。堅よあるかざ。ふい。ニふき風流士ふとて。ふゝくめで暴ぬ。次郎左衛門かくまで殿の御心よかるひしもへいつとぬく御側去らずといふ。にける。きく烟花のものどもを一日としてれもひ出さぬさしぬく。殿大磯へ入らせたまふ時。自然次郎左衛門御供せぬゝ。藝者ともまで。くるゝどれつゝしゞ。舉て殿ようちむゝひ。相公次郎さんハへ。とうがひいるとゝかんかくで次郎左衛門ハ。遂よ日の出の出頭ゝる。

殿よも今ハ次郎左衛門ぬくてゝちばすゝどの寵遇ふるふぞ。近從の儔ふゝくふをを猜ゑ。いゝふもしし。御側ゝ遠ざけんと。多方計較をぬして問搔といへども。古今獨歩の人傑とよばるゝ次郎左衛門。その動ゝとゝろ。さらふ一点の破綻かく。つねよ殿のおぼすさゝといおゝうさいまゞ御意ふきうちふさゝ至。ゝどゝ癢きゝゝろふ。手のゝでゝやうよ物しけ至。また花柳へ嫖蝶たまゝ時ハ。次郎左衛門奇異不思儀よ新しゝ趣向ゝおもひつゝ。種ゝ様ゝくと堅ともちけるふぞ。ぬまふゝ百千の幇閑拳頭と集合ても。たゞ一個の次郎左衛門ゞ風韻よれまゞいとぬしゝさまゞ大内介殿ハ。要時も御側

ばらふしたまいず。やがて一の侍臣といねをけり。

十四　文

一夕大内介殿い松菜樓よて。大燕のあそびと催され。宴くてのち。花魁瀬川ゥ洞房へいらせたまひ。次郎左衛門ふ命ぜらを。凛ゲ手ほけたる新飜の手ゑと一張彈させて瀬川ゥ膝を枕よ。とろ〳〵と御聞寐入あらをね。ゐの時次郎左衛門。瀬川よ對ひ殿よハうまく睡せたまふゥ。瀬川うち点頭ほく。ゐいゝ〳〵手ゑあて〳〵御臭息とうかゞひ。いとよくゐ志づまらせたまへをとゝふ。次郎左衛門ハ三絃子ゑさしゐき。何ゥハまゝらず一通の文ゐく物を懐よをゝいだし。ゐまゐ瀬川よ手遞典をきバ

瀬川ハふつたをとゝをらひて。おを伏いたゞきけるゝと。近從頭岩代瀑布太。隔房よをゐの擧動ゑ見ほけしゝゥバ。明の日竊ゥよ殿へゝやき。駒澤瀬川と密通せしゝゐ

ぼへい。その縁故志ゥ〳〵ゑ伏をし。言上せしゝゥバ。殿もほとほど不審おぼし。いかさまゐもひあハせしゝゐとゝもゐるぞ。予那里よ臻るおとよ。次郎左衛門をゝしほをざる時い。花魁ども極て叮嚀よたづね問を。仔細こそあらめ。汝まづゐのおとをかくし。かゑらずしも色よあらハすゐと伏ゥをゝとゝふゥくいましめとゥをける。ゐゝ一夜例のおとく。次郎左衛門よ。一張彈させて。瀬川ゥ膝ゑ枕とし。御鼾眺雷のおとく。寐たる狀して覘ゥひ

たまへ。かくとい夢よも覚らずして。瀬川ハ殿の寝息を
かうがへ。袖より封じし文とりて。次郎左衛門を見て。
媚たる文を。およびざしよさしいざせバ。次郎左衛門も
まさ。懐裏さがして文とり出し。互ひにとりかハす。
登時殿ハ。瀬川が文と取んとさしいだせしその纖手と
きつかと捉せらき。やとらつと起たまひて。「やとも不義
もの見付さ。とさけバせたまへ。御声の下。かねて手配
あるしよや。近従ども。ばらくと踊出。次郎左衛門
式おつとるまく。次郎左衛門ハ手たやく。文と燭よさ
しつくきバ。そのまくぢつと燃たちけり。上意とおぼ
かけ左右より捕まかくるなり。陽炎稲妻。神出鬼没の活

伎よ。殿ハ忿の徒声をるどく。「次郎左衛門手對をる
らとおきろあきバ。次郎左衛門ハつとうづくまり。全く
もつて手對かくハ勿体なし。小臣不義の覺る故。
申しけせんそのためと。いひくらしろふ手式まハし。
きづら囚のかとち式るせバ。人々とあひ攔止ら。
瀬川ハくと泣たをつ。殿ハ御眉逆だち。御眼おどろ
くきく。誰佩刀を拿来をと。息まき喘きて近従と
喝し。燭臺をちづけさせ。奪せらをし文おしひらき。
らくと覧かがしたまへバ。いとも優しき水茎から
で。コハいかふ。龍篆鳳章真名の文字。一丁一畫讀下ら
ぬ。海の外風の唐山文章ねと。さしもの殿も當惑あ

ま。呆をてさばし語ふく。顧をバ夥の人の前。予大國を治る身のおもしろきの文をさへ誦得ざりしと。誚る。世の人口こゝを朽とりけまとおぼえず御顔殺めらもしがさいあき。またいろはる隠語とふし。密事ゑ通ぜしもはゝらをどとふを疑念の解たまいで。幸とあをあゝ識者ゑ召。いそぎ讀しめたまひける。御側儒者安積潤藏仰を畏を。文をとをあげて讀閲をよ。をねいちおも。繪の島ふあそび道の記よて。その絶景のおもむゑ書ゆらねたるのをふして。別よ何たる仔細かし。まを燒残の文を見るふ。その篇全ゝらねども。飛鳥山よて花ゑ看の詩るを。こゝしめの文よい。次郎左衛門が添削とおぼしく。處くゝ朱字の書いをあざやゝるを。おのとき瀬川涙ゑぬぐひてうちかしまゝ。次郎ぬしゝかゝを。いをくかも漫行しきおとるけを。バ科のあるべきやうもふし。さいつぶろよを。おの大磯よ。漢文をかき詩ゑたくゝこと流行をべるよ。かくるおとゝハ。殿の好ませたまいぬとおを。妾とはじゝ姉妹ゝもるべておのをさび。ゑふんものしさむらふ次郎ぬしハ。世よまをれる博士をと。鎌倉武士の口實よ申侍ゝ。そをもへおの大磯中の妓とも。次郎主の門弟とゝらぬものもるく。をのく詩つくを文を書て。その草稿どもをバ。次郎ぬしへたのをて。雌黄とう

け侍るき。妾も法さとかけをど文かくおとを好こべる。
殿よハかくしまいらせて。文かく道をたどるしるもの
から。御目ゆ志のびて志うせしぞや。御恩ふうきこぶ君
の御機嫌もかしこを侍きバ。おのこどかるい聞え
あげまじとれもひつきど。不意今不義ともせし
かと御不審を蒙ふる。そのうへ苟ふも師たる人よ悪
名とけけんおとのかるしさふ。かく明々的よ票しあ
ぐるおおそと。涙ともふかとるける。岩代瀑布太頭
とうちろ。やよ瀬川どの。さいくをても一應よくも
ういぐさし。得て花柳よいかいる偽情ハわるから
ん。まさう發覺時の逃道よかく陳奪輸の騙局とる。

をるかへらをしをおぼえたり。いでさらバ實否を糺さ
でおくべをると。おさけおくも。瀬川ど調度手筥の類ひ
底とはらつてのこらずうちあけ。あるかぐうの文どもを一々
あらとめ査ををどさせる淫行ぶとの。文とてい一通も見
えバさいそ。濮文の草稿のを疊々とし堆だがし。儒者
潤藏かさくしよる讀見をども。總て鑑倉の名勝を
咏せしものう。さらぐハまよと月をうで花ゆ惜める風
流詞ふをバ。瀑布太も今ハ呆をうへる。佛頂面して
ひうへしいと手もちおく見えふける。おの間よ近從
のものども。手分して院くの諸姉妹よ。おのことを聞あ
いせけるよ。瀬川う言葉よたたがハず。さをがよ大磯

忠臣駒澤死
をろうをすて
諫を奉て
遂に大内介殿
賢君とみ
まらせ、比類
なき功勲
なるところ
八代集

姫自殺

ハ大都の花柳ふまが大小名さへいらせたまへバいぢ
やいらざたる。和歌のこゝろ知らで。もろこし人のもてあ
そぶとふ詩文章のこゝやるふといふ〻ういつい王知らぞ
きて。姉妹どもをゝ駒澤よりきて。きまを學びしは
あきらふまゝとぞ。世の諺よ惡よりけきい善ふ
もよしといふごとく。大内介殿ハいまゞ淵天の悪事ハ
行ひたまハねど。ひとをら酒色よ荒をたまふ御癖あれ
バよや。御氣もいとあらしくきく。朝政ねこたり。罪ねにを
きろし。人望をむけさる御ふるまひのをおほうまゝ。
またび瀬川ゞ。次郎左衛門と。王かいせし文を御覽
ぞるよ。絶て艶簡よハあらずして。きごく實明ゑる

漢文ゑ王しを。一字としても讀下したゝことあるハせ
らをで。剩その夜他門よ王入こをたる。稠人よ覗き見
られ大きやうゑる耻辱ゑ〻ゝるまひ。いゝ〻面目没に
ぼせしよ王。たちまち一念発起まし〻予いやし〻く
も大國ゑ領し。鎮西の節制と蒙をふゞら。今まで
文道をきらざ王しハ。家の耻。身のくぢ。たとひ隅田川
一盃の水ゑ汲盡してあらふとも。濁をし面ハ清ゞとし。
とひさもの昨日の非と悔たまひ。その夜いそぎ御
館よ還らせたまひ。詰且齋戒沐浴して。礼服ふゝら
たゝらを。駒澤次郎左衛門紀春雄ゑ御前よ召をこと
さし〻く席を進ましゝ汝予がたゝとをもひ。きをまで

幾十の内忠を盡せしこと滿足よおもふぞ。汝ハ家隷
ゆをども。予がたゆの守護神なり。今日より始て
汝を師とし學問を勵むべし。よく〳〵指南ふ〳〵れ
よと厚き上意ゆ蒙りける。次郎左衛門おそをいろて。
頭を席ふうちつけ。おほえを涙をとら〳〵とふぼし。
物負ゆらぬ小臣ゆ寸勞ゆ賞せらを。君さでう善
行よをくませたまひて。上ハ朝廷祖宗の御為下ハ臣
民御仁澤ゆ被ちるんこと恐悦この上や侍ろべき。
と慶賀を叙てまゆ人出ぬ。そをよを大内介殿ハ駒
澤次郎左衛門ゆ侍講をさせ。且暮たゞ學問ゆ勵ませ
たまふよ。もとよを聰明比なく。一ゆ聞て十ゆ知らせ

たまふよを。駒澤ハ浩淳なる。聖經賢傳の内よを。今
日の經濟ゆ用さつべき。樞要の語のをとゑらびて。捷徑ふ
導びき講し聞まゆらせしうバ。ゆど〳〵惹延がごとく。
御上達ゆらせらを。ねのづから心を正とを。身を脩られ
て。幕府ゆ仕まして御勢いを〳〵も懈たまいず。專ら
仁政よを〳〵ろゆ委ね。軍民を憫をたまひしほどよ上
の御きこへよろしく。德望遠近よかくをれく。げふ當世
の賢君をと。仰がをさせたまひよき。ふを志う〳〵ねがら。
全く。駒澤ゆ方すよを出て。かく名君ゆ仕たてあげ
をへるをうし。前ゆ駒澤ゆ智略よて。大磯ゆ漢文かく
ふこゆとやらせし。そをよ費用たる金子どもハ總て

當家の忠臣冷泉帶刀ら計まて雜へ出せしとゝ。まこと花街弟一の。情俠とよびゝ瀬川を托ゝて。非實と不義ある擧動まことゝ思しし。漢文をとゝかはせしが。必竟おもともて。通明ふゝ介殿ゝ諷諫ふせし辛勞ども。殿後来くいしく聞召。駒澤が已を屈して。主のたらゝかくまで心をいやし。剩さゝし寃の汚名ゝさへいといで。遂ゝ得がたき。勲蹟をふせしは。比類ふき精忠ふまと御感のおまをまを〳〵重く用ひらきて。やゝて御擢擧あを。執權の捨ゝ加へさせらを。もつぱら政事と委たまへ。さてもゝ遊君瀬川は。いやしゝ一夜妻ゝをといへどを。川竹のうを身ゝ似氣ふく。よくも駒澤が忠語を諾ひ。已が真情のかゝりをたくし。命をとゝへうをず。已ゝ刀下の死地ゝ入を思ゝから。果して駒澤もろともゝ諷諫とゝし。課せしは。世ゝ稀ゝる義婦といふべし。殿ゝもおのゝゝふゝく賞せらを。若干の金子ゝもて。おを身價と償ゝはせたまひ。をゝいち御偏房と冊ゝせたまひけを。德の流行をゝと置郡ゝして。命を傳ゝるよゝも速ゝゝとゝや駒澤次郎左衛門は天賦の博學多才小些も誇らず緊く篤厚の君子ふをども。佛家のいゝゝる方便とやらん。兵家ゝいへる智略の類ゝて。人意の表ゝる奇策を出しゝ。さしも手硬き。大猛烈の大内介殿を。さらへして。忽地大賢明の人君とふさしゝ。國家を泰山

の安をゝ置しゝハ。前代未聞の名臣ゝとゝ。在鎌倉の士太夫ハ。おのゝころもつゞらゝを沙汰ゝて。駒澤が智術德行とゞ稱賛ふける。あるゞ中ゝ駒澤。いまゞ妻ゝしゝと聞て。女子もちたらんほどのものハ。をゝ聟ゝせんと。手蔓をもとめて。縁談といひ入る人數かぎゝゝしゝ。さまゞもの駒澤ハ。初宮城阿藕次郎とて。いまゞ浪人ゝて在し時。秋月弓之助が娘深雪といふものゝ。二世ゝかけて鸞匹の約束をふせしゝ。信濃守ゝとまゞ金石のふゝゝゝゝをバ。さゞかゝ歴くの大門戸ゝゝ。姻姫と請もとめらるゝといへども。おゝを一槩ゝ推辭をゝて。とゝあへぐらけゝ。おゝふゝりて。たまゞゝふハ駒澤氏ハ。さゝしも德望人ゝあまゞど。内心ハ色好ゝて。ちゝくゝとしゝふべて縁談ハいゝまるゝふやゝあやゝしゝむものもあゝき。まゞゝハ智量ふゝき人ふをバいゝ。ゝゝる望ゝあゝて。ちゝせらゝゝゝゝ結句奥ふゝくおもふものもおなかゝ。ゝゝしゝもゝま。秋月弓之助ハ。主君太宰少貳殿の使節とおね。大番ゝゝ代ゝて。おのゝゝゝ鎌倉小下ゝ。桐が谷ゝる少貳殿の第ふあゝて。駒澤ゝゝるものハ。當時無双の豪傑ふゝゝとほゞへ聞紹介ともゝゝて。一面識ゝゝゝゝしゝ。ゝゝゝゝゝ人品ゝ裏かの家ゝ親ゝゝ交加人ゝ央。兄が獨娘深雪と呼るすものゝ。駒澤どゝ。箕箒の妾ゝ具へ。晉秦の好をむをバんと媒妁の人ゝゝて。叮嚀ゝよいゝゝゝむをバ。媒妁の人ハゝまゞ

で。御直參の歴々方よりも縁談仰入らるゝ。駒澤一
樂は固辭たきハ。とても此縁をゝるゝまじきよし玆
いひ聞せども。秋月またたき玆可を。ゼひとも曲て云
入見らきよ。たとひ足下の勞といたづらふるすとも。こゝ
拙者ゞ生涯の心やすらまバとあるがちふたのむふぞ。媒
妁人も今ハ止ことを得ずして。あだことを玆らんとハた
もへど。物ハ試ないひ看んと。駒澤は遇てきのを玆告は
けきバ。世はハ楽の外なるものゝ。此次郎左
衛門。いまゞ阿蘇次郎たゞし時宇治はて春戀たる娘の
名を深雪とハ記えしゝど。その父の名をきらざゞしは
はゝらず。明石の浦の月の夜はふしぎと。舟の上はて環

會その時をじめて秋月弓之助が娘とゝを知得と
るふ今かく家老職も發跡たるふぞ遠らず山口へ下り
かバ。かの人ハ程ちゝ玆筑前ふあゞとしたもへバ。そゝ玆
見あハせ。婚姻をもとめんと。ゝどくその准備せしゝ矢
先かゞしゝ。今日はんゝらず。媒妁の人入来ゝ。
きゝくいひ出せしゝバ。倪きゝことかぎゞ玆ゝく。ゝ玆念
たして。大宰少貳殿の御内ゝるきとを問究。まゝく
安堵て。一議はおよばず允諾けるはぞ。こゝまきかくま
き媒妁ハ事成をるとよるゝび。足を空玆して。弓之助
ゞ宿所は馳回いとはこゝを。ゝふ。きのおもむき玆告て。慶
を叙ける。弓之助ハいゝぐと。殆ぶをもひしふ。かく速は

事〻のひたるハ。娘深雪がひそうよかたらひをきゝとゝ
とハ夢よも志らねバ。全たく吾耳朶裏の福分なるべし
肚裏よ自負とさへ生じ。とまあへずたくまものして。己が
喜び表ハし。あつく媒人をを賞し付る。

朝顔日記巻之四　終